

論文の和文要旨	
論文題目	韓国語と日本語の内外空間名詞の対照研究 - コーパスの用例に基づく連語構成の分析を中心に -
氏 名	金 恩惠(キム・ウンヘ)

本論文は、韓国語と日本語の内外空間名詞を対照し、語彙的意味の広がりや意味拡大の様相に見られる韓日両言語の特性を明らかにすることを目的とするものである。

具体的には、韓国語と日本語の内外空間名詞「안, 숙, 밖, 길」と「うち, なか, そと, おもて」について、多義の意味領域を記述し、その結果を基に両言語における意味転移による語彙性と文法性の変化にも注目しつつ、韓国語と日本語の内外空間名詞を対照したものである。本稿では、実際に言語場で使用された資料を集めたコーパス資料を用い、計量的調査と分析を行った。分析の対象としては、単独の単語ではなく他の単語との関係の中でその意味が実現される意味構造体である「連語構成」を中心に、語彙間の結合関係を分析し、記述した。さらに、連語構成を分析して得られた類義関係と反義関係を再検討し、意味上の重なりや対立を探り出し、一つの意味グループとしての意味用法の関係を描いた。

また、韓国語と日本語の内外空間名詞の意味拡大の様相を観察し、そのような意味拡大による語彙的・文法的意味の変化がどう現れているか、またその変化の度合はどうかになっているかに注目しつつ、二つの言語を照らし合わせた。以下に、第1章の序論と第2章の先行研究を除き、本論文の内容をまとめた。

### 第3章 研究の基本的な観点

第3章では、本研究を進めるための基本的な観点を示した。第一に、意味構造体としての連語の観点で、語彙の意味を個々の語の固まった意味としてとらえるのではなく、語彙間の結合関係により実現されるものと見る立場によるものである。第二に、空間名詞の実体性と意味の関係という観点で、空間名詞は一部の用法では本来の実質的意味を表し、単独でも自立名詞としてふるまうが、一部の用法では語彙的意味が薄れたり失われ、実体性が薄れる様子を現わすことに注目して、空間名詞と共起する先行の要素と後行の要素の特性を分析し、その結果を基に、それらの先行・後行の要素と結合する空間名詞の意味領域と用法を記述しようとした。第三に、非明示的ルールと自然さの観点で、韓国語と日本語のコーパスを用いて、その計量的調査と分析の結果から、出現頻度により示される結合のルールと自然さの判断を試みることで、実証的かつ客観的な根拠を提示した。第四に、内外空間名詞と共起する名詞および動詞

の分類は、本研究の結論にもつながる重要な要素であることから、既存の名詞分類と動詞分類を検討し、本論文で用いる名詞分類を示した。

#### 第4章 韓国語の内外空間名詞「안, 속, 밖, 길」の意味用法

第4章では、韓国語の内外空間名詞「안, 속, 밖, 길」と格助詞の結合形を中心語とする連語構成の用例を収集し、中心語の先行要素の統辞的形態により、先行名詞を伴う類型①、用言の連体形を伴う類型②、先行要素を伴わない類型③に分け、その先行と後行の要素の現れ方と意味特徴を分析し、中心語との意味実現の関係の中から「안, 속, 밖, 길」の意味領域を分析し、次の結果が得られた。

- 1) 内外空間名詞の使用頻度は、内部を表す空間名詞が外部を表す空間名詞よりはるかに頻繁に用いられ、「속>안>밖>길」の順であり、語彙別にも、格助詞別にも量的偏重が激しく、「안, 속」は「에, 에서」, 「밖」は「으로」の頻度が高い。
- 2) 「안と속」, 「밖と길」は、基本義の具体的空間の意味で用いられる場合に意味用法の重なる部分が多く、実際の言語場においては、混用の様相も見られる。ゆえに、類義の対の境界線上に位置し、意味領域の重なりを現わす場合は、計量的調査から得た出現頻度に基づく「傾向性」を一つの非明示的ルールとして用い、自然さを判断することができる。
- 3) 「안と속」, 「밖と길」は、基本義から抽象的意味に意味拡大が進むほど、共起する名詞や用言が限定され、意味領域が離れていき、独自の意味を表すようになる。
- 4) 具体空間を表わす「안」と「속」の弁別点は、空間の内部の可視性と不可視性、開放性と閉塞性などで、ほかにも、[안]は広さを持つ拡散の空間、存在空間、移動空間であるのに対し、「속」は深さを持つ密閉の空間、自然物・自然現象の空間、存在、継続状態の空間、心理・感情の空間の意味特性を持つ。
- 5) 「밖」と「길」の重要な弁別点は境界の有無である。「밖」は、境界を越えて、あるいは通して「うち」と「そと」が疎通できる空間であり、その境界線または境界物から離れた空間も含まれる三次元の空間である。それに対し、「길」は、境界といえる対象物を伴うことはなく、一体物の表と裏の関係にある。「밖」は、移動、出現、事態発生の視覚的・聴覚的空間、立体空間であるのに対し、「길」は、存在、付着、露呈、状態変化の触覚的空間で、平面空間である。また、抽象化した空間では、「밖」は社会的空間を、「길」は個人的空間を現わす。

#### 第5章 「うち, なか, そと, おもて」の意味用法

第5章では、日本語の空間名詞「うち, なか, そと, おもて」を分析し、次の結果が得られた。

- 1) 内外空間名詞の使用頻度は、内部を表す空間名詞が外部を表す空間名詞よりはるかに頻繁に用いられ、「なか>うち>そと>おもて」の順であり、「なか」が「うち」の3倍にのぼる。
- 2) 「うち」は非実体性名詞との共起が70%以上で、<時間, 心理・感情の抽象空間>を表すことが多く、具体空間を表すことはあまりない。それに対し、「なか」は、具体空間と抽象空間にわたって意味領域

の幅が広い。「うち」と「なか」は、具体的空間など実体性が高い意味領域ではあまり重なりが見られず、実体性のひくに抽象的意味領域では意味領域の重なりが多くなる。

- 3) 「うち」と「なか」は、心理・心情の抽象空間では一部意味境界の重なりを見せるが、共起する後項の連語の排他的分布から意味用法に違いが見られる。「うち」はくよりプライベートな心理空間、抽象空間、不可視の閉鎖的空間を、表し、「なか」はくより概念的・観念的、開放的抽象空間を、表す傾向がある。
- 4) 「そと」は、平面・立体の空間で、方向と範囲の制限のない空間で、境界を介する空間であるのに対し、「おもて」は、平面空間の場合は境界物が存在しない空間で、立体空間の場合は、「そと」の一部分で、基準となる空間や具体物の正面、前面に限定される空間を表す。
- 5) 「そと」は、＜視覚、聴覚、非付着＞の空間であるが、「おもて」は＜視覚、聴覚、付着＞の空間である。
- 6) 抽象的・社会的空間を表す場合、「そと」は、自分より離れた外部の空間で、否定的イメージであるのに対し、「おもて」は「うち」の空間で、「前面に出る」などに見られる肯定的・中心的空間であり、意味領域は重ならない。

## 第6章 韓国語と日本語の内外空間名詞の意味用法の対照

第6章では、第4章と第5章においてなされた分析の結果を基に、韓国語と日本語の内外空間名詞を対照し、その対応関係、類似点と相異点を明らかにした。韓日両言語を対照する際は、これまでの分析の結果を基にして、内外空間名詞の意味範疇を＜具体空間、抽象空間、状況、時間、範囲＞に分類したうえで、「안, 속」と「うち, なか」、「밖, 겉」と「そと, おもて」の意味をそれぞれ対照した。

- 1) 韓国語の「안」と「속」は、基本義である具体空間、身体空間、観念的抽象空間の意味領域で重なる部分があり、実際の言語使用の場では混用の様子も見られる。それに対し、日本語の「うち」と「なか」は、具体空間の意味領域で重なりは見られず、具体空間を表す韓国語の「안」と「속」はいずれも「なか」と対応する。このようなことから、具体空間の意味領域では、日本語より韓国語の方が具体空間を細分化して表現しようとする傾向があると言える。
- 2) 先行名詞が抽象的・心理的空間を表す場合、韓国語は「속」と共起するのに対し、日本語は「なか」と共起する頻度が高いが、先行名詞が観念的・客観的な意味領域を表す場合は、「うち」とも共起し、抽象空間を表す韓国語の「속」は日本語の「なか」と対応することもあれば、「うち」と対応することもある。このようなことから、抽象的・心理的意味領域では、韓国語より日本語の方が抽象空間をより細分化して表現しようとする傾向があると言える。
- 3) 具体的あるいは抽象的な状況を表す場合、韓国語は「속」を、日本語は「なか」を用い、内部空間名詞の間で対応関係が見られる。また、時間の範囲を表す場合、韓国語と日本語のズレが目立つ。日本語は主に「うち」を用いるのに対し、韓国語は、時間的期限を表す場合は「안」を用いるが、ほかに時間の範囲を表す場合は「중, 때, 진, 동안」などを用い、韓日両言語の内部空間名詞の間で一対一の対応関係は成立しない。
- 4) 数量的・集合の範囲を表す場合、日本語の「うち」と「なか」は、韓国語の「중, 가운데」と対応し、韓

国語の内部空間名詞との対応関係は成立しない。

- 5) 具体空間を表わす場合、韓国語の「밖」は立体の移動空間や存在空間、視覚的・聴覚的空間を表わし、「겉」は平面の視覚的空間や触覚的空間を表わす。それに対し、日本語の「そと」と「おもて」は、どちらとも立体的具体空間、視覚的・聴覚的空間を表わすことができ、立体的具体空間の意味領域では部分的に重なりが見られる。このような立体的具体空間を表わす「밖」は「そと」や「おもて」と包括的対応関係を示すが、反対に、方向や範囲が限定された「おもて」は、「밖」ではなく、「앞」とのみ対応し、対象関係は成立しない。
- 6) 平面の具体空間を表わす場合、「겉」は主に具体物の表面を表すが、「おもて」は具体物の主となる面、自然空間の表面の状態を表すことが多く、意味領域のズレが見られる。感情・心理の抽象空間を表す場合、「밖」は感情などを出す対象となる外部・社会空間を、「겉」は感情を表す者自身に属する空間を表し、このような「밖」と「겉」は、「そと」と「おもて」の意味領域と対応関係をあらわす。抽象的意味を表わす「겉」は、否定的意味を表すのに対し、「おもて」は、心理的抽象空間を表わす場合は「겉」と意味領域が重なるが、社会的抽象空間を表わす場合は、社会の前面、主となる位置といった肯定的意味を表し、「겉」とは意味領域が重ならず、対応関係を持たない。

## 第7章 韓国語と日本語の内外空間名詞の語彙性と文法性の対照

第7章では、韓国語と日本語の内部空間名詞「안, 속」と「うち, なか」について、その意味拡大による語彙的意味と文法的意味の変化を対照した。その結果をまとめ、以下に示す。

- 1) 韓国語と日本語の内部空間名詞は具体的な空間の意味から抽象的な意味へ拡大する面で共通しているが、詳細においては、その意味拡大の様相と程度には差が見られる。このような意味拡大による語彙性の希薄化と文法的変化の相異は、「안, 속」と「うち, なか」の対応のズレの原因にもなっている。
- 2) 韓国語の場合、「안」は、具体空間を表す先行名詞と共起して具体的空間を表す用法が中心であるが、数量的範囲、時間、概念的抽象空間への意味拡大と特定の格助詞との結合制約が見られる。例えば、「안에」は時間的領域へ、「안에서」は抽象的意味領域への変化が目立ち、状況や心理的抽象空間への意味拡大は見当たらない。それに対し、「속」は、具体的空間を表す用例より抽象的意味を表す用例が約2倍にのぼり、「안」に比べて、抽象化が進んでいると見られ、「안」とは異なり、「속」は状況や抽象的・心理的空間への意味拡大が進んでいる反面、時間や範囲の領域への意味拡大は見られない。また、連体節の修飾を受ける「속」は、具体的内部空間を表わす語彙的意味は薄くなり、「ある事態や状態の持続」を表す。文法的な面では、明確に文法化が進行したとは言えないが、助詞との結合や語順に制約が見られる。
- 3) 日本語の場合、「うち」は、具体空間を表す例はまれで、時間と範囲への意味拡大が目立つ。特に範囲を表す用法のうち、助詞を伴わない形態ではと語順の制限が見られ、文法的面の変化がより進展したと見られる。時間を表す「うち」は、「안」のみならず「때, 전, 사이」や依存的名詞「동안」と対応する。このような語彙的意味の変化および文法的面の変化を基に、時間と範囲を表す「うち」は、「안」に比べ、語彙的意味がより希薄化し、文法的面の変化が進行したといえる。「なか」

は、具体空間という基本義を維持している段階では意味的自立性を保持しているが、意味拡大による格助詞との結合制限が見られる。範囲を表す「うち」と「なか」は、「안, 속」ではなく、自立性のより弱い「가운데, 중」と対応する。

- 4) このようなことから、内部空間名詞の抽象化の結果として、語彙的意味の薄れ、文法的な面における助詞結合の制約、語順の制限を確認し、このような意味の抽象化による語彙的要素の希薄化と文法的要素への変化は、空間名詞という一つのグループあるいは体系のなかで一定の方向として進んでいる現象であることが確認し、それぞれの空間名詞がどのような段階に来ているかをありのまま見て取ることができた。

## 第8章 結論では、本稿で考察した全体の内容を要約し、総括した。

以下に、本研究の持つ意義と課題をまとめて示す。

本論文の意義としては、第一に、相対的空間名詞である内外空間名詞が自立名詞としての用法と関係名詞的用法を持つことに注目して、韓国語の「안, 속, 밖, 길」と日本語の「うち, なか, そと, おもて」について、語彙間の結合関係および系列関係を通して、実際の意味実現のレベルに見られる意味用法をより細密に記述することができた。このような語彙間の結合関係に関する情報は、単に意味記述の問題など語彙研究の分野に留まらず、外国語としての語彙教育の分野でも利用できる部分がある。第二に、韓日両言語の内外空間名詞の意味拡大の様相や進展の過程に見られる違いが、韓国語と日本語の内部空間名詞の対応関係のズレの原因であることを明示的に示すことができた。また、このような抽象化による語彙的要素の希薄化と文法的要素への変化は、コーパスから収集した用例を分析した結果により裏付けられ、内部空間名詞という一つの意味グループのなかで一定の傾向を見せることが確認できた。第三に、韓国語と日本語の対照においては、韓日両言語の使用様相や分布を示すことができた。意味領域の記述と意味関係の対照の基礎となる資料作りが一部分ではあるができたことで、その結果を基にして、ある空間を表す概念がそれぞれの言語でどう表現されるか、またはどう表現されないかという点を明らかにすることができた。韓国語と日本語の内外空間名詞の対応関係に見られる一致とズレは、両言語における空間と時間、心理・感情などの意味拡大の様相の違いによることを明らかにし、実際に言語教育の場でよく取り上げられる類義語の問題や言語間の対応関係などの問題についても、より具体的に触れることができた。

最後に、本論文の残された課題としては、第一に、空間名詞を中心語として、共起する連語の意味特性からそれぞれの内外空間名詞の意味領域を取り出し、韓日両言語を対照したが、主に語彙論的観点で研究が行われ、連語をなす用言と対象語、補語との関係、格助詞と述語との関係など、統語的な面の分析をさらに深める必要がある。第二に、韓国語と日本語の内外空間名詞の対立項に、内外空間名詞以外の語彙が位置していることがあるが、今回は考察の対象から外している。しかし、双方向の対照に見られる非対称項目は、個別言語の分析では見えてこない特徴を指し示すものでもあることから、それらを含んだより広い範囲の考察が必要である。第三に、意味拡大による語彙的意味の希薄化と文法化について、それぞれの内部空間名詞の語彙的意味の希薄化と文法化による変化を記述しようと試みたが、空間名詞間、あるいは言語間の文法化の度合いをどう判断するかという客観的な基準を論じたり、提示する

ことはできず,さらなる考察が必要である. 現段階では, 内部空間名詞の意味拡大の結果として, 単独ではその意味が曖昧になったり非文になるため, 他の補充成分を必要とし, 依存的になる傾向が見られるという点, このような語彙的意味の薄れにより文法的な面では助詞結合の制約や分布の制限などが見られるという点を確認し, 記述することに留まった.